

平成 28 年度みんなで支える森林づくり南信州地域会議 第 1 回議事録

- 1 開催日時 平成 28 年 7 月 21 日 (木) 13 時 30 分から 15 時 30 分
- 2 開催場所 飯田合同庁舎 501 号会議室
- 3 出席者 委員 7 名 (新井、井口、柄澤、清水、林、間瀬、村松)
事例発表者 1 名 (NPO 法人山法師 尾曾氏)
山本下伊那地方事務所長、小島林務課長、事務局 8 名

4 会議概要

- (1) あいさつ 山本所長
- (2) 委嘱状交付
- (3) 委員自己紹介
- (4) 座長選出 (間瀬委員選出)
- (5) 会議

【座長就任挨拶】

【間瀬座長】

・森林税活用した事業について意見を述べる会議、事務局の説明に対してしっかり意見をいただきたい。

議事

会議事項(1)平成 27 年度までの森林税活用事業について

【間瀬座長】

・事務局説明を

【事務局】 資料により説明

- ・森林税活用事業について
- ・里山整備の実績について

【尾曾氏】

・H27 年度里山リーダー育成事業について (山法師の取組、自伐林家の後継者の育成サポート等の実践活動について)

【間瀬座長】

・大鹿村の場合カラマツ林が主、(国の方針で) 間伐が切捨てから搬出になったため森林整備費用が掛かり増しになり、実施面積を減らしている。間伐材を搬出しても 7,000~12,000 円/m³にしかならず、補助金がなければ赤字になる。大鹿村では森林の所有面積が大きく比較的森林整備がやりやすいが、所有が細かく分かれていると集約化が必要となり大変、それに森林税を充てているのが現状か。

【村松委員】

- ・自伐林家の育成は非常に難しいと感じている。
- ・自分は林業研究グループに所属しているが、メンバー自体が減ってきている。
- ・若い人に呼び掛けて伐採技術を習得してもらっても自分で薪を調達する段階までしかいかない。その後離れてしまう。
- ・林業は危険との意識がありその先までは中々できない。
- ・資源は十分にある。自分は 66 歳だが、昔自分で植えた木を今切っている。林業だけで生活するのは大変だが、他の仕事と組み合わせ補助金と併せて何とか暮らしていけると思う。
- ・急には変わらないので小さな取り組みからやっていくしかないが、何とか森林税を利用して人材を育てることができないか。

【尾曾氏】

- ・(NPO の活動として) 自伐林家に対するサポーターの役割を果たせばいいと考えていたが、そもそも若い人がいないこともあり、飯伊地域では住民の年齢構成的に林業後継者の育成は難しいと感じている。
- ・本来サポートの役割をするつもりだったが、やむを得ず自分たちが主体的に森林整備を行い、伐採した木をいただいている。

【村松委員】

- ・伐った木を売って晩酌代にするというところから始まっていい。
- ・定年退職してからわざわざ危険なところ（林業の場）に行く必要がない。
- ・年金で食べていけることもあり今の人は山へ入ろうという気持ちがない。
- ・周りの人の山を見ても手入れをしたいと思う山がいっぱいあり、森林整備の話所有者に持ちかけても、材価が安いので林家へお金を返せないことから「おまえが儲けるだけだろう」といわれてしまい結局手を付けられない。
- ・政策として目標をどこに置いているのか？いつ間伐から皆伐にシフトするのか？
- ・林業の方に人の気持ちをもっていかないと進まない。
- ・これからの後継者をどうするのか等の課題を解決していかなければ、いくら間伐をやれと言われても進まない。

【小島林務課長】

- ・いきなりは皆伐に切り替えられない、様子を見ながらになるのではないかな。
- ・木材の価格がとても安い状況がある。皆伐して一時的な収入になってもその後の植林経費が出るのか心配。
- ・対策として、更新伐という強度の間伐をする方法もあるが、次に植林する経費までをねん出できても林家の手元にお金が残らない。また、植えてもニホンジカによる食害等もあり頭が痛いところ。
- ・今の倍の木材価格であれば大概解決するが、決定打はない状況にある。

【村松委員】

- ・途切れることなく森林の管理を続けられるように人材を確保することが第一である。

【小島林務課長】

- ・若い人が都会から I ターン等で林業に就業しても定着率が低い。稼ぎにならず、仕事もきつい。

家族を持つとなおさら生活が大変になるため。

- ・林業をやっていく人は、地元に住み、地元の山を守ることを考えるということが重要だと思う。

【村松委員】

・森林組合の作業班の若い人の実際の生活がどうなのかわからないが、毎日同じことの繰り返しだけでは面白くないのではないかな。もっと幅広く山に携われる人間が育成できれば良いと思う。

・天竜村で学友林整備の際に年1回生徒相手に林業の面白さを伝えるよう講師をしているが、その際に感じるのは、林業に携わってきた年配の人間が林業の魅力を十分に伝えられていないのではないかなということ。

- ・年寄りが見本に山に入ることが必要。

・山（林業）は大変だとしか年寄りが子供に伝えていないのではないかな。山の面白さを若い人たちに伝えるべきである。

【尾曾氏】

・木を伐採したときに快感がある、やってみると非常に楽しいが、業としては成り立つかどうかの問題

【井口委員】

・チップやペレットに使用する、木材としての一般的にはC材といわれるものを扱っているが、売る場合にチップ材は製紙会社が設定した価格で売らざるを得ない。

- ・ペレットは原油価格との競争が厳しい。

・自分の利益を上げようと価格をたたいて買うと山側（の経営）が回らなくなることが分かっているのでそれもできない。いかに経済性を高めるかが重要

- ・もしも人身事故が発生してしまえば影響が大きい。

- ・安全であることと、経済性が担保されることが必要、事故に対する補償が必要

- ・急激に人を増やすことはできない。なんとかやりくりしながらやっていくしかない。

- ・危険性と経済性との見合いの中で対応

- ・売り先への価格交渉もできない。

- ・バイオマス発電が始まったら、ペレットやチップ用の材料が土場からなくなってしまった。

- ・（需要側と供給側の）連携性が良くない。

- ・事情が分かるだけに山側にもっと材を出せとも中々いえない。人もいない、機材もない。

- ・急激な拡大は負担が大きい。

・自分がバイオマス発電をする側となったとき、一拍おいて、森林の成長量に見合う形での発電量と搬出を考えていきたい。

- ・長く続けていかなければいけないということがある。

・A材B材等の建築材が下がってしまっている。エネルギー材になるのはC材だが、それだけ搬出する訳にはいかない。

- ・発電所は止めることができないという理由だけで、現在三重県からも買い付けにきている。

- ・材が無くてペレットが作れない状況に陥っているが問題であると感じている。

【村松委員】

- ・現場をやる人がいない、長く現場に携わる人の育成を真剣に考えないといけない。

【井口委員】

- ・パークを利用して自らブルーベリーの栽培をしているが、農業も林業も同じで若い人が入ってくればいいが、このままでは衰退してしまう気持ちにさせられる。問題は大きい。
- ・重労働の上、蜂に刺されても畑や山に出たいという人はいない。
- ・農業も林業も人に対して魅力的な産業になれば先は明るいのではないかと思うが切り口が難しい。
- ・林業の6次化を目指すといのは魅力的であり、つまらないという感覚より楽しいというふうになればよい。

【新井委員】

- ・木を使う側の人間として感じているのは、1期目に比べても社会が変化してきたと思う。
- ・自分も5畝の水田あるが、委託して作ってもらい4.5俵の非常に高価なコメを食べている。林業は農業以上に近代化が必要とされているが中々進まない。
- ・哲学者の内山節氏が「山にしごとに行き、里に稼ぎに行く」とよくいうが、儲けがでなくても山は仕事として人生をかけてやるという風潮があり、美しい話だが逆にネックになっているのかと思う。
- ・搬出が合わないといわれている、(伊那市の) DLD のような企業が赤字でなく経営が成り立つなら、どうして山でもできないのか、ビジネスモデルとしてつながらない。
- ・間伐から商業伐採(皆伐)へ、ドイツは既に移行しており、伐採後すぐに植栽し、素材は建材、バイオマスへと、等級わけして利用されている。
- ・日本の林業もそういう業態に変わる時期か、今逆にそういうところが日本の林業にもチャンスか? 補助金を対症療法として使うのではなく、イノベーションを先取りする事業、個人ではできない事業に補助金をあてるべき。
- ・現在の家づくりの国の政策としては、ゼロエネルギー住宅という方向性がでたが、その評価基準には断熱材を厚くしてエアコンつけてという都市型住宅しか相手にしていない。地域材の使用や木質バイオマス等は評価されないため、利用拡大につながらない。
- ・国の方針に関わらず、長野県はこうだという政策を出すべき。
- ・普通サイズの建築材、金物で大型木造建築ができるようになったが、長野県はまだ大断面の集製材にこだわり鉄骨造やRCより高コストな公共木造建築捨てきれない。
- ・視野を広くすると500㎡以下の住宅を建設する場合、木造建築の方が圧倒的に安価である。そのあたりを先取りする必要がある。
- ・そういう意味では結構やることは沢山あると思う。

【井口委員】

- ・ドイツにある、ヨーロッパ全体の中小企業のための技術研究センター、22kWのバイオマス発電+ボイラーを開発完了した。
- ・英国、バイオマス電力と廃熱の熱固定買取制度があり、設備の需要が高い。
- ・3~4件分の電力及び給湯の供給ができる規模
- ・小規模発電設備、日本にも導入できないか検討している。ドイツ仕様の設備が日本に導入できる

か、自分のような中小企業では実験的な設置までは中々踏み込めない状況がある。

- ・エネルギーマネジメントのような補助金があれば、導入の可能性はあるかなと見ている。
- ・大きな発電スタイルは全国的に見られるが、逆になるべくコンパクトに収めた小さなスタイルを長野県で独自にやるのはありではないか。
- ・木で全てを賄うというような、新しいものを発していかなければいけない。

【間瀬座長】

- ・林業後継者対策として、大鹿村では村内に居住してもらい森林組合に就労するという事業を実施している。三年間個人と森林組合に5万円/月それぞれ補助している。

【村松委員】

- ・森林整備の最前線にいる森林組合の作業班の収入が少ない。モチベーションを上げることを考えれば、森林税を使うのが妥当かどうかかわからないが、1年間がんばって林業に従事したらボーナスを支給するようことなどができないか。現金でなくても山を提供する等でもよい。
- ・その山に自分で木を植えて林業の楽しみを感じてほしい。
- ・若い木の生長はすごいのでそれを見るだけでも木を植える楽しみがある。
- ・極端かもしれないが若い人を呼び込むように大胆な発想で森林税を使えないか。

【間瀬座長】

- ・極端にしては良い提案、県の方で何か考えてくれるのではないか。

会議事項(2)森林づくり県民税活用事業の平成27年度の実績及び平成28年の計画について

【間瀬座長】

- ・事務局説明を

【事務局】 資料により説明

【間瀬座長】

- ・「公共施設整備事業」大西公園ビューパークのテーブルを新調したら古い椅子が目立ってしまった。次年度あたりベンチも税事業で更新をお願いしたいと考えている。
- ・大鹿村カラマツ材、床、壁材スギと同じような値段で扱っているので利用願いたい。
- ・カラマツ材を使用した公衆トイレの新設を予定
- ・大池高原の木道の修繕も計画、なるべく木を利用した事業に取り組んでいる。

【清水委員】

- ・木材の値段があがらない、付加価値をつけるという発言があったが、「信州の木活用モデル地域支援事業」でビジネスモデルとなる仕組みづくりの事例はあるのか？

【事務局】

- ・ビジネスモデルかどうかはあるが「薪ステーション」塩尻市の例がある。
- ・根羽村産スギを利用した木材の新しい活用方法の提案がされてきている。今後カタログにして売り出ししたいと考えている。

【清水委員】

- ・商工部関係で、農商工連携、六次産業化、儲かる仕組みを作っていくということだが、林業も付加価値を付け、儲かる仕組みをいれていかないと持続していかない。基本が確立しないと（人材も）定

着しない。

- ・活用モデル事業→儲かる仕組みづくりを頭に置いた事業を作っていく必要がある。

【間瀬座長】

- ・林業では一番難しいかもしれない。根羽村の場合全部一つの村で倒産しないでやっているのもそれなりにやっているのではと見ているが、木曾ヒノキのようなブランドになっているのか。

【事務局】

- ・そこまでにはなっていない。

【間瀬座長】

- ・他に無ければこの辺で議事を終了します。